

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
386	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Aggressive crime, alcohol and drug use, and concentrated poverty in 24 U.S. urban areas. 米国の 24 都市における攻撃的犯罪、アルコールや薬物使用と貧困の集中	
執筆者	
Valdez A, Kaplan CD, Curtis RL Jr.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Drug Alcohol Abuse. 2007;33(4):595-603.	
キーワード	
攻撃的犯罪、アルコール、逮捕者、薬物、薬物と暴力の関連	
要 旨	
<p>目的：</p> <p>米国では薬物使用と攻撃的犯罪は関連が深いと思われがちであるが、個人レベルや地域レベルでの狭い範囲では、それらの関連は複雑で微妙である。薬物使用と攻撃的犯罪の関係には、個人的背景や地域環境が複雑に絡み合っている。</p> <p>方法：</p> <p>我々は、多重ロジスティックモデルを用いて、米国の 24 都市の男性逮捕者(N=20,602)を対象として、攻撃的犯罪と薬物使用の関連を、地域レベルの貧困状態を示す変数（高校中退率、男性の未就労率、生活保護需給率、女性が家長の家庭の率）の集中度や個人レベルの社会背景因子がどの程度予見するかを調査した。</p> <p>結果：</p> <p>結果は、婚姻状況や労働状況（教育や雇用状態）などの個人の社会的背景が、薬物中毒や攻撃性へと向かう主要な経路であるという我々の仮説を支持していた。ランダムインターセプトモデルでは、地域レベルの変数である、女性を家長とする家庭の割合や生活保護を受ける家庭の割合が、個人レベルの変数では説明できないバリエーションのうち 3.17%を説明可能であることを示した。このことは都市環境では、社会階層によって、暴力的犯罪で逮捕されるかもしれない状況に違いがあるという我々の仮説を裏付ける。</p> <p>結論：</p> <p>われわれの結論は都市のゲットー（イタリア人居住区）やバリオ（スペイン人居住区）には固有の暴力的文化があると主張する文化親類学者の反対することになる。</p>	